

論文審査の結果の要旨

報告番号	甲 第 1099 号	氏 名	西 村 仁 志
論文審査担当者	主 査 岡田 健次 副 査 駒津 光久・沢村 達也		
<p>(論文審査の結果の要旨)</p> <p>Ankle brachial index (ABI) が低値 (0.9以下) であることは高い感度、特異度をもって予後不良疾患である末梢動脈疾患を診断することが可能である。一方ABI異常高値 (> 1.4) を呈する群の臨床的特徴、長期予後については明らかではない。本研究は、ABI高値を呈する患者群の臨床的特徴及び長期予後について後ろ向き観察研究で検討した。</p> <p>その結果、以下の成績を得た。</p> <ol style="list-style-type: none">ABI高値群とABI正常群では、年齢、性別、高血圧、糖尿病、喫煙歴、冠動脈疾患、陳旧性脳梗塞、心房細動に有意な差は認めなかった。ABI高値群はABI正常群と比較して有意にbody mass index (BMI) が低く、脂質異常症が少なく、慢性腎臓病、血液透析の施行が多かった (P = 0.003, P = 0.023, P = 0.017, P < 0.001)。多変量ロジスティック回帰分析で交絡因子を調整すると、ABI高値に寄与する独立した規定因子はBMIの低値と血液透析の施行であった (オッズ比: 0.93; 95%信頼区間: 0.87–0.99; P = 0.049, オッズ比: 6.18; 95%信頼区間: 3.05–12.52; P < 0.001)。ログランク検定で評価したABI高値群における主要心血管事象 (心血管死、脳卒中、心筋梗塞の複合エンドポイント) の累積発症率は、ABI正常群と比較して有意に高値であった (P = 0.005)。総死亡、心血管死の累積発症率についてもABI高値群がABI正常群と比較して有意に高値であった (P = 0.026, P = 0.003)。コックス比例ハザードモデルを用いた多変量解析を施行すると、血液透析の施行を含む古典的心血管リスク因子で補正後も、ABI高値は主要心血管事象に対する独立した予後予測因子であった (ハザード比: 2.07; 95%信頼区間: 1.02–4.20; P = 0.044)。 <p>これらの結果から、BMI低値、血液透析の施行がABI高値に対する独立した規定因子であると考えられた。また、ABI高値群の長期予後は不良であり、ABIが高値であるという事は既存の心血管リスク因子とは独立した予後予測因子である事が示唆された。よって、主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。</p>			